

揃へ置べシト申渡シタリ、是ハ如何ナル事ニヤト、用人モ合點行ザレドモ、家老ノ申付ナレバ、右ノ品々相揃へ置ク所ニ、翌日菅沼主水登城シ、只今御藥ヲ差上申ベキ間、御表へ御出ナサルベシトテ、御居間ノ次ノ間へ、蒲團ヲ二ツ三ツ重子敷キ、其上ニ組板庖丁鉢皿ノ類ヲ置キ、金瘡療治ノ用意悉ク調へ置テ、左京大夫殿御表へ出ラル、トヤガテ菅沼蒲團ノ上へ上リ、自ラ左ノ方ノ足ヲ出シ、脇差ヲ拔キ、股ノ肉ヲ五六寸切取り、組板ノ上ニ置ト、醫師ハ早速疵所ヲ洗ヒ藥ヲ付、木綿ニテ卷、殘ル方ナク手當シタリ、サテ菅沼ハ切取シニクヲサシ身ノ如ク作り、酒ニ浸シ、マナ箸ヲ以幾度モアラヒ置、サテ銚子ヲ取寄セ置キ、右肉ヲ二切喰ヒ、舌打シテ是コソ御告ノ妙藥ニテ候、召上リ候ヘトテ差上ル、左京大夫殿是非ナク一切口ニ入ラレ吞込レシガ、ゲツト云テ吐出シ給フ、菅沼是ヲ見テ眼ヲ怒ラシ御比興也、御病氣御全快ナケレバ、御生甲斐ナシト申ケル、是ニ因テ左京大夫殿止事ヲ得ズ、又一切吞込給へバ、今一切ト云テ以上三切進ラセ、其後酒ヲ進ラセ、篤ト落付タルヲ見テ退出シケル、其時詰居タル者ハ各心ニ驚キ、一言モ云ズ息ヲ詰テ見テ居タルト也、左京大夫殿其後全快シ、再ビ發ル事ナク、勇健ニテ長命ナリシトカヤ、菅沼ガ忠志ノ厚キ事末代ニモ有難キ事也、

〔愈の須佐美追加下〕元祿の頃、牧野内匠頭御小姓組番頭にて、當番なりしが、御社參の前にて、忌服を禁せられしを、心得違たる事有て、職をけづられて籠居すべきよし、命せられければ、かき籠て三四年になりぬ、疾も出て快事もなかりしかば、横溝只七と云士、年若きものなりしが、主君の年も老、若し此うちに變も有なば、家を滅さん事を深く悲、させる罪にもあらざるよし、こまやかに書記し、川越少將の第に往て、執事の人々に對面したきよし言入けるに、事六かしげに聞へければ、ありあはざる由を云出しぬ、執次人云るは、我等に申おかれよと有しに、何とぞ執事の御方へ、直に申度侍り、出仕有ん迄待申べき由云ける時、陪臣として刀を携られし事、如何なるよしにや